

## 粘土を素材とした幼児期における製作技法の発達

坂井田 節・鈴木 玲子

### Development of the Artistic Technique on Clay Work in the Infant School Children

Takashi Sakaida and Reiko Suzuki

#### Summary

In this paper, we examined action of clay work on infant school children. The purpose of this study focused on elucidating how infant school children are able to develop on the problems in contemplative faculty and in artistic technique through action of clay work.

Children of young age manufactured article of taffy, dumpling, candy and such like simply by technique of beating, making into a ball and extending.

Children of middle age manufactured article higher degree than young age by the same technique with young age.

Children of senior age manufactured cubical and motive article by technique of the production from one block of clay.

Received May 31, 1990

Key words : Infant school children, Clay work, Development of the artistic technique.

#### I. はじめに

##### 1. 研究の背景

1歳前後の乳幼児の手の活動を観察すると、ものを握ったり、握ったものを口にもっていき食べられるかどうか、固いかどうかなどを確かめようとしたりする。この場合手の活動は、ものを握って運ぶという本能的で単純な役目をしているのみであるが、成長に伴って、投げる、ちぎる、たたく、やぶるなどといろいろな行動へと発展していく。また重さ、肌ざわり、形などものそのものの認識へと発達していくことが知られている。このような活動を通して身体の発育、脳の発達が促進され、活動が活発で経験が豊かであればある程、その発達程度はより高度になっていく。このようにして乳幼児の手の活動は、自然発生的な活動から次第

に行動ともとの関係の中で、一つの意味をもちながら活動するという意識的な活動へと発展していく。

乳幼児は起きている限り行動的であり、いろんな欲求をもちそれらを遊びという形を通して展開している。その遊びは自然に多くのものとかかわり合いをもつようになる。しかし乳幼児が欲求するすべての素材が、乳幼児の身边にあるとは限らない。したがって乳幼児の身边に発達の程度に応じた素材が存在しないような環境下では、手の活動は次第に狭くなり、不活発なものになってしまう。ある調査<sup>(1)</sup>によれば、全校1200人余の児童のうち家庭で箸をもったことのない児童が、1年生までで36人(3%)、ナイフや包丁で果物の皮をむけない児童が90%もあった。このように生活の中で、子ども達の手・指を使う機会が減り、また手・指を使う遊びも減少していることから、幼児の時からものを形づくるなど造形活動を通して創造の芽を養い、造形感覚を豊かにすることの意義は、以前にも増して大きいものがある。

このように重要な造形活動についても、現実には保育の中では描画活動による平面表現の方が多くようである。しかし立体表現の方が平面表現に比べてより複雑な内容をもっており、手・指の発達にも有効な手段となろう。そこで立体表現の造形活動を通してどのような能力が培われたらよいかを、要約すると以下のようなになる<sup>(2)</sup>。

- ① 組み立て対象となる事物を、その全体像という立場からも個々の部分およびその相互関係という立場からも、目的志向的に知覚する能力。
- ② 子どもが現に所有する部分と照らし合わせて、事物を分析する能力。
- ③ 組み立てを行う順序にしたがって、組み立てようとする事物を組み立て段階ごとに表象する能力。
- ④ 空間的にいろいろな状態におかれた時、組み立て対象となる事物全体についても、個々の部分についても表象できる能力。
- ⑤ 事物についての表象を、実践のためのモデルに具体化する能力。

すなわち、形・大きさ・色など個々の特性を知覚・分析する能力、対象を表象する能力、空間に再現する能力、表象に組み立てる能力などを順序立てて培う必要があるということになろう。どのような素材をどのように展開したら、所期の目的が達せられるであろうか。

## 2. 研究の目的

環境が幼児を教育するとまでいわれるように、幼児をとりまく環境は幼児の生活の中で重要な位置を占めている。それらの中で最も重要であるのが応答的環境である。例えば粘土のように、手で握りしめたり、伸ばしたり、押ししたり、指を突っ込んだりすれば、その形が容易に変化するという現象も一種の応答的環境であろう。したがって粘土は、手・指を使って立体的表現ができ、しかも応答的環境素材として利用できるなど、保育素材としてはきわめて有効であろう。

さらに粘土の特徴として、触覚感が挙げられる。幼児は粘土さえあれば他の遊び道具の何

粘土を素材とした幼児期における製作技法の発達

よりも遊びの持続時間が長いのは、この触覚感も一助となっていると思われる。

そこで本研究においては、保育素材として重要な粘土を用いて自由製作と課題製作を実施し、幼児期の年齢による素材に対する感覚、思考、扱い方などの違いおよび製作技法の発達過程を分析するなどして、幼児期における手・指の発達を促するにはどうすればよいかについての基礎資料を得ようとした。

## II. 材料および方法

対象園児は、本学附属幼稚園の年少児21人(男12人, 女9人), 年中児23人(男9人, 女14人), 年長児22人(男11人, 女11人)・21人(男11人, 女10人)の合計4クラスである。粘土は油粘土を用い、1人当り600gとしたが、必要に応じて補充した。

製作活動一1は、特別な指示を与えず自由に好きなものを製作させた。その過程を通して粘土に対する感覚、思考、扱い方の違いなどから、幼児期の思考能力や製作技法の発達過程を分析しようとした。適宜発問しどんなものを製作しているかなどを確認しながら観察した。観察期間は活動一2も含めて、1989年11月、12月の2か月間とした。

一方活動一2は、各年齢とも共通の課題を与えて製作させ、幼児の年齢的な発達との関連において心身の発達の違いを分析しようとした。共通の課題は、粘土板の裏についている押し絵を利用して何かを製作させることである。その製作過程を通して形・大きさなど個々の特性を知覚(感覚能力)・分析する能力、対象を表象する能力、空間に再現する能力、表象を組み立てる能力などを分析し、各年齢における身体や思考の発達過程や発達程度について究明しようとした。

## III. 製作活動の結果および考察

### 1. 製作活動一1

#### (1) 年少児の作品

年少児の作品をいくつか列挙し、それら作品の製作過程の技法についてそれぞれ分析した。

##### ① キャンディー(棒つき)

本園恒例の作品展に出すために棒つきキャンディー作りをしたので、キャンディー作りが園児の間で流行していた。作り方は、粘土のかたまりを細長く伸ばしたものである、中には巻いたキャンディーに棒をつきさして、棒つきキャンディーにする園児もいた。また、巻いたキャンディーをたたいて煎餅のように平たくして楽しんでいる園児も何人かいた。このような活動を通しての技法は「のばす」、「たたく」であった。

##### ② 手裏剣

男子の間で手裏剣遊びが流行しており、粘土で作った手裏剣を飛ばして遊んでいた。作り方は、粘土のかたまりに棒とへらを十字に押しつけたり、指先で粘土をつぶしてつけたりし

ていた。技法としては、「接合(押しつける)」、「接着(指先で接合部分をつぶす)」であった。

### ③ 型ぬき

年少児でクッキー作りをするために、導入として粘土を使って型ぬきをさせたことがある。その時の体験から園児は型ぬきに興味を示した。作り方は、平たくした粘土に型ぬきの型を押しあてるもので、型ぬきの型の大きさよりも小さい粘土を使っている園児が多かった。それは型ぬきによって完全な形ができなくても、ただ粘土を押すことの感触を楽しんでいるようだった。技法は、「押す」であった。

### ④ あめ、だんご

手で粘土を丸めて、あめやだんごを作って楽しんでいた。作り方は、大きめの粘土のかたまりを両手のひらを使って丸める。表面がでこぼこのものや形の整った球形にはならない園児が多かったが、中には形のよい球形を作る園児もいた。個数的には1, 2個ぐらいで数も少なかった。技法は、「丸める(両手のひらを使って)」であった。この場合の球は、全体に大きめであった。

## (2) 年中児の作品

年中児の作品をいくつか列挙し、製作過程の技法について分析した。

### ① ヘビ

園児と一緒に粘土製作をしていた時、カタツムリを作ってみんなにみせた。これをみていた園児の1人が「私、ヘビ作れるよ」と言って、すぐ作った。作り方は、年少児のキャンディー作りと一緒にあった。細長い粘土をくるくると巻き、残った端を上に向け先を少し曲げ、ヘビらしい雰囲気を出した。技法は、「のばす」であった。しかしヘビの鎌首をもたげさせる製作技法は、「立てる」という技法の初期段階だと思われる。

### ② パンダ

パンダが好きな園児がいて、楽しそうにパンダを作っていた。作り方は、粘土を丸めそれを平たくたたいて顔にした。顔にはヘラで目と口をかき、そこに小さくちぎった粘土の耳をつけた。その顔に平たくした胴体をつけ、さらに耳と同じ程の大きさの手をつけた。技法は、「丸める」、「たたく」、「切断(指先でちぎる)」であった。また耳や手をつける技法は「接着(指先で接合部分をつぶす)」であった。さらにヘラで顔に目と口をかくという製作技法は、「彫る」という技法の初期段階であると思われる。このような製作過程の中で、年少児にはみられなかった「体作り」がでてきた。しかし足はみられず不完全な立体的表現であった。

### ③ ウサギ

「先生、私ウサギが作れるよ」と言って1人の園児が、一生懸命ウサギを作っていた。大変よくウサギの特徴をとらえた作品であった。作り方は、粘土を丸めてウサギの顔を作り、そこに細く伸ばした粘土の耳をつけ、長方形の少し平たくした胴の上に顔をのせた。さらに粘土を小さく丸めて尾にし、尾部につけた。足の部分はパンダの場合と同様みられなかった。

粘土を素材とした幼児期における製作技法の発達

技法は、「丸める」、「のぼす」であった。この場合の「丸める」は、両手のひらを使ってと指先での二つに分けられる。さらに顔や耳は、「立てる」という技法の初期段階だと思われる。

#### ④ ロボット

テレビや本などに出てくるロボットに男子は興味があり、黙々とロボット作りに励んでいた。作り方は、粘土で丸めた顔にがっちりとした胴体をつけ、ベルトや顔面につける装飾などは粘土を細く伸ばしてつけた。手・足は少し太めでがっちりしていた。また装飾も多くしかも複雑化していた。ロボットの製作に慣れた園児と思われる。技法は、「丸める」、「のぼす」、「たたく」であった。全体的にみると立体的表現がみられ、「立てる」という技法の初期段階だと思われる。しかし当初から「立てる」ことを意識して製作していないので、安定感がなく作り終えてから立てようとしたが、倒れてしまった。

#### (3) 年長児の作品

年長児の作品をいくつか列挙し、製作過程の技法について分析した。

#### ① 人形

「先生、人形作ってあげようか」と園児が話しかけてきて楽しそうに人形作りをしていた。作り方は、粘土を丸めそれをたたいて平たい顔を作り、同様に少し長めの胴体をつけて、手・足は細く伸ばした小さい粘土をつけた。さらに顔面にはへらで目と口をかいた。技法は、「丸める」、「たたく」、「のぼす」であった。またへらで目と口をかくという技法は、年中児の一部にもみられた「彫る」という技法の初期段階であると思われる。

この人形製作中に1人の園児が製作園児に向かって「○○ちゃん、立たせることができないんだよ」と言っていた。この「立たせることができない」という発言は、製作した人形が不完全なものであることを指摘しており、この発言から年長児なら誰でも立たせることができるよう製作すべきだと言っている。そこでこのような年長児の思考や技法の発達を考慮しつつ、観察を進めていくことにした。

#### ② ゾウ

ゾウが好きだという園児が「先生、みてね」と言いつつ、ゾウを作っていた。作り方は、年中児でみられたように胴体、足、鼻と分割して作るのではなく、一つのかたまりから足を作り、鼻の部分は同一かたまりの一部を細く伸ばして上に向け立派な鼻を作っていた。耳だけは別の粘土から円く広げて頭部につけていた。技法は、「のぼす」、「接着(指先で接合部分をつぶす)」、「立てる」であった。「立てる」という技法が、年長児では明確に現われてきた。さらに「一つのかたまりから作る」という彫刻に近い技法が、ここで初めてみられた。

#### ③ 人間(家族)

このクラスでは紙粘土による人間作りをした経験があり、園児は楽しそうに自分や自分の家族の人間作りをしていた。作り方は、ゾウの場合と同様にほとんど一つのかたまりから、1人の人間を作り出していた。技法は「のぼす」、「立てる」、「一つのかたまりから作る」で

あった。力強い作品でしかも重心が下にあるので安定感があった。また人間1人ひとりが違う姿をしているのが特徴的であった。すなわち作品には「動き」が感じられ、生き生きした作品に仕上がっていた。さらに個体数も多く、1人で5体も製作する園児もいた。

#### ④ カブトムシ

粘土製作をする中で、小さな図鑑をもってきて、それをみながら各種の生き物を作っている園児がいた。作り方は、前例と同様に一つのかたまりから作っていた。胴体の体節も正確に作り、角は粘土をひねり出し大きく強調させた。胴体の両側面から足となる部分をひねり出し、細く伸ばした。技法は、「のばす」、「立てる」、「一つのかたまりから作る」、「ひねり出す」であった。「ひねり出す」という技法は、年少・年中児にはみられなかった。この技法は「一つのかたまりから作る」という技法と密接な関連があると思われる。また本をみながら作るという製作活動も、年長児の特徴であった。この園児は、カブトムシを作った後も図鑑をみながら別の生き物を作っていた。

## 2. 製作活動—2

各年齢に共通した課題で作品を製作させ、幼児の年齢的な発達との関連において、発達の違いを分析しようとした。課題は押し絵である。粘土板の裏にいくつかの絵柄がついており、それを利用した。各年齢とも押し絵には大変興味をもっていった。押し絵でどんな作品ができるか、年齢による違いを究明しようとした。

### (1) 年少児の作品

押し絵の大きさに合った粘土を使う園児と、粘土の使用量が少なすぎて絵柄がはみ出してしまう園児とに分かれていた。年少児においては絵柄が重要なのではなく、例えば鬼の絵柄でも、クリスマスツリーでも、ヨットでも何の絵柄でもよいのであろう。何故ならば、園児の興味は押し絵の上から粘土を押すと色々な模様が出てくるとい現象にあるように思われたからである。すなわち、粘土に現われる絵柄に意義を感じているのではなく、ただ単に粘土に現われる模様を楽しんでいるものと思われる。

さらにあらかじめ押し絵の大きさを確認していないということである。ただ早くやってみたいという衝動にかられ、絵柄の大きさまで確かめない園児もおり、そのため粘土の使用量が不足したのであろう。以上のような観察結果から年少児は粘土に押し絵をすることにのみ興味をもち、単純にその動作を繰り返していた。したがってそこから先への発展性はみられなかった。

### (2) 年中児の作品

年少児とは異なり、大部分の園児は押し絵と粘土の大きさが合っていた。製作中1人の園児が「先生、私クリスマスツリーを作るからみてて」と言って、早速作り始めた。絵柄を作るまでの過程は、年少児と同じである。しかしその後へらを取り出し、クリスマスツリーの

粘土を素材とした幼児期における製作技法の発達

形どおりに余分な粘土を切り落していった。細かな作業であるのに、楽しげに切り落していた。この技法を模倣している園児も数名いた。

年中児は、押し絵板からどのような絵柄がでてくるかを事前に認識しており、年少児のように模様として楽しむのではなく、絵柄そのものの造形美を楽しむことを、重要に考えているように思われた。したがってクリスマスツリーにみられるように、絵柄そのものを生かした作品ができあがったものと考えられる。

### (3) 年長児の作品

年長児では例えば動物の絵柄の押し絵を作った後、別の粘土で小さな球形を作っていた。球をいくつも作って、動物の押し絵をした粘土の周りにつけていた。さらにその内側にも同じように円板状に小さな球をつけていった。何を作っているのかと発問してみたら、「ケーキ!!」と得意そうな返答があった。小さな球は指先で作らねばならないので、指先の発達が伴わないと幼児が作るのには難しい。また同じ大きさの球形をいくつも作るには、根気や集中力が必要であろう。

ここで球形の製作技法について考えてみると、年少児は両手のひらを使った大きな球しかみられなかった。年中児では一部の園児で小さな球形がみられたが、年長児に比べるとやや大きめの球であり、製作数も少なかった。しかし年長児になると指先の発達が顕著であり、根気や集中力も養われてきており、その結果小さな球形を作ることができ、製作個数も多くなったものと思われる。

この年長児のケーキ作りにおいては、園児の思考の発達から押し絵を一つの素材として、さらに発展・応用させるといった進歩がみられた。この園児は粘土に押し絵をしてから、すぐに小さな球を作って押し絵につけていた。すなわち、当初から押し絵を利用してケーキ作りをしようと考えていたと思われる。ケーキ作りについては、年少児ではみられなかったが、年中児の一部にはみられた。しかしこのように押し絵を応用するといった思考はみられなかった。

結局この園児はケーキに模様をつけようと考えて、押し絵を応用したものと思われる。これは、押し絵そのものの製作に満足するのではなく、押し絵を一つの素材としてケーキ作りに発展させたものであろう。このように年長児では、ただ押し絵の絵柄を楽しむのではなく、押し絵の概念を越えて一つの素材として、何かに発展させる活動のできるようになった。

## IV. 製作技法についての考察

IIIにおいて製作活動一 1, 2 を通して、粘土製作における各種技法について述べた。ここではそれら各種の技法について、各年齢でどのような発達の差違がみられたかについて考察する。

## 1. 製作活動一 1

### (1) 「たたく」

「たたく」という技法は、最も単純な技法であろう。何故ならば、この技法は年少児に最も多くみられ、年少児にとって「たたく」ことはほとんどの場合、あまり明確な目的をもたず、一つの技法というよりはむしろ動作のようであった。すなわち、粘土を「たたく」ことにより、粘土の柔らかな感触や粘土のかたまりが次第に形を変え平たくなっていくといった変化の面白さに興味を示しているものと思われる。

この技法は年中・年長児にもみられ、例えば年中児のパンダ作りでは顔や胴体の製作に、年長児の人間作りでは顔や胴体、手・足の製作にこの技法を用いている。しかしこれらの場合は年少児の「たたく」と同じ作業であっても、その技法の使い方はまったく異なる。すなわち両者の違いは、目的意識の有無にある。年少児では、思う存分「たたく」ことを体験することが中心である。しかしやがて「たたく」だけでは満足できないことに気づき、何かを工夫しようとする思考が生まれてくる。このような思考の発達、年中・年長児への技法の発達として現われてくるのであろう。そのような見地からすれば、年少児の「たたく」という作業を単純な動作とみるのではなく、そこから発展していく可能性をもった技法の一つとして、考える必要がある。

### (2) 「のぼす」

粘土のかたまりを「のぼす」ためには、両手のひらが必要になる。しかもそれぞれ均等に力を入れないと細長く「のぼす」ことはできない。ただ単に「のぼす」だけなら簡単であるが、細長く「のぼす」ことは難しい技法である。この技法は「たたく」技法と同様年少児に多くみられた。粘土を細長く伸ばしキャンディーなどを作っている園児もいたが、ほとんどの園児は、ただ「のぼす」だけで満足し、それ以上の発展性はみられなかった。このようなことから年少児においては、両手のひらで粘土を「のぼす」感触を楽しんでいるとも考えられる。あるいは次第に粘土が細長く変化していくことに興味をもっているとも考えられ、「たたく」と同様な意味をもっているものと思われる。

一方細長く「のぼす」ことは、両手のひらを均等に使うことになり、幼児期においてこのような作業は、身体の発育を高めるばかりでなく、脳の発達を促進するという面においても、非常に重要な技法であろう。年少児ではただ「のぼす」だけの単純な動作であったが、年中・年長児では「たたく」の場合と同様、「のぼす」という技法も目的をもった製作活動へと発展していった。

### (3) 「丸める（両手のひらを使って、指先で）」

「丸める」という技法は、各年齢とも頻繁に用いられていた。丸めて球形を作るのであるが、球はいろいろな作品を製作する場合の素材の一つとして、幼児にとっては欠くことので



粘土を素材とした幼児期における製作技法の発達

きない形なのであろう。また特に年少児においては、粘土を転がす快さもあるものと思われる。このような見地から「丸める」作業が多くなるわけだが、各年齢によって違いが観察された。具体的には、形・大きさ・製作個数・手のひらで作るか指先で作るかの違いである。

まず形については、年少児ではどうしても歪な球形になりやすい。それは手の力の加え方や製作に費やす時間の少なさなどに原因があると思われる。さらに何のために球形を作るのかといった目的意識の薄さも挙げられるだろう。これに対し年中児になると、作品を作る上で「丸める」という技法で作ったものが必要になるので、形のよい球を作ろうとするようになる。年長児の場合も同様であるが、年中児より速い時間でしかも正確な球形を作ることができるようになる。

大きさについては、年少児は大きめの球形を作っていた。作り易さを考慮すると大きめの球になるのであろう。年中児においては、小さい球形を作れる園児も一部にみられたが、年長児になると小さい球形を作れる園児が多かった。これは指先の発達が関係してくるものと思われる。それに伴って手のひらで作る技法から指先で作る技法を多く用いるようになる。また球の製作個数も活動の必要上から多くなるものと思われる。

#### (4) 「立てる」

日常の保育活動では、描画活動の方が工作活動に比べて多い傾向にあることは、すでにⅠ－1で述べたが、平面的に表現することの慣れからか、なかなか「立てる」という立体表現活動に発展していかないといった面がある。粘土製作の園児を観察しても「立てる」という技法が観察されはじめたのは、年中児からであった。例えば平面的な顔を立体的にする、ヘビの鎌首をもち上げるなど、完成されたものではないが、明らかに「立てる」という技法がみられた。

このように年中児では、人形やロボット、生き物などの作品が多くみられ、平面的な作品が多い中で、「立てる」という技法の初期段階的な作品もみられた。しかしこの場合に手は存在したが、足はほとんどなかった。これは製作過程の思考の中で「立てる」ことを意識して製作していないことによるものと思われる。例えば年中児の作品であるパンダは足がなく、しかも平面的であり、「立てる」ことを思考せずに製作したものと思われる。またロボットでは、2本の足はついているが、左右の足の長さや体全体に対する足の太さは、バランスのとれたものではなかった。これを製作した園児は、立てようとしたが倒れてしまった。これは「立てる」ことを意識せずに製作し、製作してから立てようという思考がはたらか試みたのであろう。

ここで重要なことは、立たなかったという試みに対する結果論とその評価ではなく、立てようとした「試す」という行為である。これまでの年中児に対する観察の中で、このような行動をした園児はみあたらなかった。この園児は、製作後ではあるが、明らかに「立てる」ことを意識しているのである。このような意識の芽ばえは、徐々に製作過程においても思考

の中にみられるようになり、「立てる」という技法の確立につながるのであろう。

年中児の作品のほとんどに足がない理由として、実物の形を正確に把握していないことも挙げられる。年長児の作品であるカブトムシをみると、複雑な形をしておりしかも正確に作っている。これはその園児の各種技法の上達もあるが、形をよく把握していることが、より完成度の高い作品の製作につながったのであろう。すなわち、表象対象を正確に認識することは、「立てる」作品を製作するために重要な条件となろう。

年長児の作品には、ゾウ、カブトムシにみられるように、「立てる」という技法を用いた作品が数多くみられた。このような事実から、「立てる」という技法は年長児において確立されるものと推察される。前述した年中児のロボットで、立たなかった理由として左右の足の長さ・体に対する足の太さのアンバランスを挙げたが、これを製作技法の面からみると、顔・胴体・手・足を別々に作って、くっつけたことによるものであろう。すなわち、「一つのものから作る」という製作技法を用いれば、安定感のある「立てる」ことのできる作品に仕上がったものと考えられる。この「一つのかたまりから作る」という技法は、「立てる」という技法と密接な関連があると思われる。年長児の中には、このような技法でしっかり立った作品を作る園児もいた。したがって、前述した年中児のロボットの作品は、「立てる」という技法の発展過程にあるものと考えられる。

#### (5) 「一つのかたまりから作る」

粘土のかたまりからものを作る場合、頻繁にみられたものは丸めたあめ・だんご・キャンディーなどであった。またそれは年少児に特に多くみられ、年中児でもみかけられた。この場合の技法は「丸める」、「のぼす」であり、単純な作業である。しかし年長児になるとそこに「ひねり出す」という技法がでてくる。これは「一つのかたまりから作る」という技法の中に含まれるわけだが、この技法は別々に作った体各部を組立てて「立てる」という技法をさらに発展させたものであろう。

(3)の「丸める」で述べた通り加齢に伴って製作の目的意識が高まり、形も複雑化していく。例えば、II-1に示した年長児のカブトムシでは体に体節があり、角もあり足も6本あって形としては複雑である。この園児もおそらく最初は、胴体・角・足などを別々に作り、それらを「接合・接着」していたであろう。しかし徐々にその技法に疑問をもつようになったのであろう。すなわち、別々に作って後で「接合・接着」するより、はじめから足のある状態で製作するためには、一つのかたまりから製作すればよいことに気づいたのであろう。このような試行錯誤をくり返した結果、複雑な形の作品は一つのかたまりから作った方が作り易いという結論に達したのであろう。

「一つのかたまりから作る」という技法は、年長児にしかみられなかった。年中児から一部の園児にみられた「立てる」という技法は、年長児ではほぼ全園児に確立されていた。さらにその技法が発展して、「一つのかたまりから作る」という技法が生まれたものと思われる。

粘土を素材とした幼児期における製作技法の発達

これは、彫刻の初期段階と思われる技法である。この技法を用いることにより、立体的であるばかりでなく、年少・年中児にはなかった作品に動きがみられた。例えば年長児の作品である人間にみられるように、力強さと共に、明らかな動きが感じられた。

以上のように思考と技法の発達は、脳や手先の発達にのみよるものではなく、興味や関心の高まりとも密接な関連があるものと思われる、したがって幼児期は、できるだけ多くのものを見聞させたり、体験させたりすることによって、興味や関心を高め、充実感を味わうようにすることが、保育者にとって重要であろう。それによって心身の発達を促し、感性・創造性・思考性の面において、豊かな人間形成がなされていくのであろう。

## 2. 製作活動— 2

III— 2で述べたように各年齢とも押し絵には大変興味をもっていた。そこで各年齢共通の課題として、押し絵を導入し、比較の対象とした。観察の結果、年少児は押し絵の上から粘土にできる各種の模様に興味をもった。すなわち、押し絵の絵柄そのものに興味があるのではなく、粘土に現われる模様の出現に満足しているようであった。いくつもの模様を作ることに関心の中心があり、そこからの発展性はみられなかった。

年中児になると、押し絵の絵柄を重要にする傾向がみられた。そのため技法的にもできるだけ美しい押し絵をし、絵柄を生かした作り方が多くみられ、押し絵の概念を生かした楽しみ方が確立されていた。

一方年長児になると、年中児よりさらに思考を発展させた作品作りがみられた。すなわち、押し絵の絵柄に満足することなく、押し絵を一つの素材として考えることである。これは押し絵の概念を越えた発展的な活動である。例えば、押し絵の絵柄をケーキの模様にみたとて、ケーキ作りへと発展していった。

以上のような結果から、各年齢に共通した製作課題を与えて製作活動させたところ、年少児では、粘土で遊ぶことに興味の中心があり、年中児では本来の押し絵製作に中心があり、年長児では押し絵製作のみでは満足せず、押し絵を一つの素材として、別の作品を作るといった発展性がみられた。このように年齢によって、思考や技法の面において明らかな違いがみられた。

## 3. 保育現場への応用

本研究の結果から保育現場に応用できる知見としては、次のようなことであろう。幼児の加齢に伴って思考や技法の発達に違いがみられることから、まず粘土を用いた製作活動について、年齢に応じた思考や技法の発達についての標準的な到達度マニュアルを確立する必要がある。

次に個々の幼児の製作活動を観察し、思考や技法の面においてマニュアルと比較検討して

みる。その結果当該年齢の標準到達度に比べて、思考や技法の発達が遅れている場合は、適切な指導・助言を与えることによって、その発達を促すように保育する必要があるだろう。一方標準より発達している幼児については、思考や技法がさらに発展するような指導・助言を行うことが望ましい。

個々の能力を最大限に発揮させるような個性的な保育を行うことが重要であるとされており、その場合個々の現時点での能力を判断する一つの目安として、粘土製作を到達度の判断基準とすることは、有効な方法であろうと考えられる。

## V. 要 約

(1) 本学附属幼稚園児を対象として、粘土を素材として用いた製作活動を実施した。製作は自由製作と、各年齢に共通した押し絵による課題製作の二つを実施した。これら二つの活動を通して、幼児期における思考や技法の発達について、年齢的な発達との関連において、発達の違いを比較検討しようとした。

(2) 自由製作の観察結果から、年少児の製作技法としては最も単純な「たたく」、「丸める」、「のばす」という技法を頻繁に使っていた。作品もあめ、だんご、キャンディーといった簡単なものが多かった。さらにそこから何かに発展させようといった、思考面からみて目的意識をもって製作しているとは思えなかった。これら三つの技法は、粘土の触覚感を楽しむ上では最も適しており、年少児が粘土製作に興味や関心をもつ背景には、粘土の特徴である触覚感が重要な要因となっているものと考察された。

一方年中児や年長児では、粘土を「丸める」ことで顔を製作し、「のばす」ことで耳を製作するなど、用いた技法にはそれぞれ何を最終的に製作するのかといった目的意識をもっていることが特徴的である。さらに作品の個数や形についても、最終的な目標と密接な関連があり、例えば「丸める」という技法を用いて作った球形であるが、年少児の球は形が歪で、「丸める（手のひらを使って）」という技法のため、作り易い大きめの球になり、個数も少なく、球作りが最終目標であった。しかし年中児では全体的な作品作りの中で、一つの部分を表象するのに球形が必要であり、したがって、形の整った球を個数も多めに作るようになる。

年中・年長児になると同じ「丸める」でも、指先で丸めるという技法に発展し、年長児では年中児に比べて、より速く、より正確な球形を作ることができるようになる。このような年齢的な違いは、加齢に伴っての思考の発達により、徐々に製作の目的意識が明確化されていくことと、指先の発達とによるものであろう。すなわち、目的意識が高められ、手先の器用さも加わり、作品の形が複雑雑化することにより、製作に費やす時間も長くなり、作品の個数も増えていくと考えられる。

(3) 課題製作の観察結果から、年少児の場合は押し絵の技術が未熟であり、粘土に押し絵をすることで絵柄に興味を示すのではなく、単なる模様として楽しんでいた。すなわち、

粘土を素材とした幼児期における製作技法の発達

いくつもの模様を作ることに興味を中心にあり、そこから先への発展性はみられなかった。年中児では押し絵の技法も確立され、粘土に美しい押し絵をし、押し絵の概念を生かした遊び方が確立されていた。一方年長児では、押し絵の概念を越えた発展的な活動がみられた。すなわち、押し絵を一つの素材として利用し、別の作品を製作するといった傾向がみられた。

(4) 立体的な表現である「立てる」という技法は、不完全な形ではあるが年中児からみられた。しかし当初から「立てる」ことを考えて製作しているのではないと思われる。その理由として、人形や生き物の作品に足がみられなかったことである。これに対し年長児になると、ほとんどの作品に「立てる」という技法がみられ、したがって足もあり形も複雑化し、「立てる」ことを当初から意識した活動がみられた。

また「一つのかたまりから作る」という技法もみられた。この活動では「ひねり出す」という技法を用いていた。「一つのかたまりから作る」という技法を用いたことによって、作品が立体的であるばかりでなく、年少・年中児ではなかった「動き」が作品にみられた。このように「立てる」という技法が発展して「一つのかたまりから作る」という技法を考案し、その技法を用いることによって作品が動きのあるものに発展していることが明らかとなった。

(5) 年齢によって思考的・技法的な発達に差違を生じたが、同一年齢内においても個人差があり、年齢ごとに明らかな段差があるのではなく、発達段階は一連の連続したものである。したがって幼児の身体的・思考的発達を促すためには、まず各年齢における標準的な発達の基準を設定し、その基準にしたがって個々の幼児の発達段階を把握した上で、それぞれの幼児に応じた適切な指導・助言を与えることが、幼児の能力を最大限に発揮させることにつながると考えられる。

## 謝 辞

本研究の機会を与えられ、御鞭撻を賜った聖徳学園岐阜教育大学附属幼稚園の林国太郎園長、大塚久美子主任に深甚の謝意を表します。さらに研究に御協力いただいたきく組川村弘子教諭、きりん組森真由美教諭、もみじ組尾関郁乃教諭、さくら組高橋貴恵子教諭に深謝致します。

(注)

- (1) 1976年5月岡崎市立羽根小学校で調査。1977年7月朝日新聞記事。
- (2) ウーソン編「幼児期の感覚教育」より引用。

## 参 考 文 献

- (1) 武田浩之編集「作って遊ぼう」、1981、小学館、東京
- (2) 芸術教育研究所編集「乳幼児の教育」、第19号、1983、黎明書房、名古屋。
- (3) 桑原 実・林健造・豊田勝秋・松本 敏編集「幼児絵画製作教育」、1971、東京書籍、東京。